

2010年度学科教育点検・評価(FD)報告書

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

学科教育点検・評価(FD)報告書 目次

工学部

人間科学研究センター	1
英語教育センター	2
数理科学研究センター	4
電気電子工学科	11
応用化学科	13
電子機械工学科	15
機械工学科	16
環境技術学科	17
基礎理工学科	18

情報通信工学部

情報工学科	20
通信工学科	22

金融経済学部

アセット・マネジメント学科	24
---------------	----

医療福祉工学部

医療福祉工学科	25
理学療法学科	27
健康スポーツ科学科	30

総合情報学部

デジタルアート・アニメーション学科	33
デジタルゲーム学科	36
メディアコンピュータシステム学科	43

添付資料

デジタルゲーム学科	1. W2008年度カリキュラム	47
	2. W就職活動記録シート	48
	3. W卒業研究制作ガイドライン	49
	4. W卒業研究制作スケジュール	50

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

工学部 人間科学研究センター(以下、AHセンター)は、総合科目群の担当部署として、全学的な視野で本学教育目標に依拠し総合科目群の編成を行い、毎年度前年度の総括を踏まえ必要な改善を行ってきた。

今年度については、大学におけるキャリア教育の「義務化」や寝屋川キャンパスのカリキュラム改訂、キャップ制の導入などと係わって、キャリア形成科目群(D群)の設置について提案を行ってきた。また語学群(B群)科目における英語重視については、豊かな人格の形成という教養科目群としての総合科目群として、第2外国語を軽視することは好ましいことでない旨を指摘し、同時に第2外国語群における資格取得についても提案してきた。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

中国語や韓国語、また日本語上達法などの履修人数が多数にのぼる科目では、今年度は多数の履修者が予測される科目では、予めクラス数を増やし、また予想を超える履修者があった場合は、クラス分割基準を目安に、学生の学習希望の尊重、教育環境の適正化などから、クラス分割を行ってきた。

複数のクラスを複数の者が担当する科目については、担当者同士の情報共有、経験交流などを図る検討会などを開き(日本語上達法担当者会、非常勤講師との懇談会など)、教育改善に資している。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

教育相談、生活相談などについては、直接卒研ゼミなどを担当していないが、学生相談委員5名中4名がAHセンター教員であり、学生支援の視点から学生の授業参加、キャンパス生活を見守っており、必要な協議は、学生相談室カンファレンスの場で行っている。

4. 卒業研究指導について

学科の専門以外のテーマでの卒業研究を希望する学生については、学生の希望によりAHセンター教員も、卒業研究にあたっている。ちなみに、2011年度の卒研担当教員は、平沼講師、川地准教授、金田准教授、小田教授の3名である。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

センター内で、キャリア教育など合同学習会を開催してきた。

以上

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

本学の英語教育においては実用性のある英語力を養成することを目標とする。英語を苦手とする学生が多い中、その目標達成に向けて授業を行なうためリーディング関連、文法関連、コミュニケーション関連の科目を設定している。中に、「基礎英文法セミナー」、「TOEIC 特別セミナー」、「英語特別セミナー」など学生の能力と学習意欲に応じて受講できる科目を開講している。また、e-learningやDSを使用するなど、学生が自分に合った内容を学習できる自主学習型授業として「英語コミュニケーション(目的別コース)」を開講している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

新入生を対象に、4月のオリエンテーション時にプレイズメント・テストを実施し、そのテスト結果に応じて二つのレベルに分けクラス編成をしている。1年次配当の英語リーディングのクラスでは、レベルに応じた統一教科書を使用している。統一教科書に関しては毎年内容評価を行い、継続使用の可否を検討している。なお、本学では英語を不得手とする学生が多い。彼らの学習意欲向上を図るには丁寧できめ細かな教育を実施できる環境が必要と考える。その一策として、現在の1クラスの上限人数(75名)の改善を図りたい。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

入学時のオリエンテーションにて新入生に対し英語学習に関するガイダンスを実施し、本学の英語科目、科目の選択方法、履修方法を含め英語学習の概要について説明した。

4. 卒業研究指導について

卒業研究に文系のテーマを選んだ学生1名の指導にあたった。人間科学教育センターと合同で2月末に中間発表会を行い、その後も文献の検討・解釈・引用などの指導を行い、3月に人間科学教育センターと合同で卒業研究判定会議を行なった。直接、就職に影響を与えるような指導はできなかったが、一つのテーマについて自信を持って語ることのできる人材を育成したという点では評価に値するであろう。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

・英語学習支援という形態で、専任教員による授業外での学習支援を実施した。寝屋川学習支援室では2010年度は前期・後期あわせて20回の学習支援(1回の学習時間は15時から18時までの3時間)をR号館2階の英語学習支援室において行なった。参加者は15名を超えた。英語が苦手という学生から、もっと英語力をつけたいという学生まで、さまざまなニーズがあったが、個別指導という形で対応することで、それぞれの学生のニーズにあった学習支援を実施することができた。若干名ではあったが、毎回連続的に参加して、意欲的に英語学習に取り組んだ学生もいた。また昨年度に引き続き、大学院とのメールでの英作文指導も行なっている。指導をはじめたころから比べるとかなり英

語の構造を意識した作文ができるようになった。

・今年度前期には、特任講師によるプログラム「ランチタイム英会話」を開催した。寝屋川キャンパスでは水曜日の、四條畷キャンパスでは火曜日の昼休みに30分間行なわれた。後期には、特任講師によるオフィス・アワーとして寝屋川キャンパスにて月曜日(「英語でキャリア・アップ」)と木曜日(「日常の英会話」)に各90分のプログラムを、また、短期の特別プログラムとして「院生向け英語学習」を火曜日に提供した。これらの各プログラムには同一の学生が繰り返し訪れることから、学習意欲を促す一定の効果があったと思われる。

・「TOEIC支援プログラム」:2010年7月30日Z号館10演習室にて、年内にTOEICを受験する学部生、院生を対象に個別トレーニングを行う旨説明会を実施した。参加学生はF学科3回生2名、G学科2年生2名、H学科1年生1名、J学科3年生2名・1年生2名、N学科2年1名、P学科3年生2名・2年生5名、Z学科2年生1名、院生2名の計20名である。メディアコミュニケーションセンターよりDS本体、DSソフト(えいご漬け、もっとえいご漬け、もっとTOEIC DS トレーニング)の貸与を受けるとともに、アルクネットアカデミー2を活用した個別コーチングを実施した。TOEICを受験するまで毎週、担当教員(柏原先生)からコーチングを受けるよう義務づけ、進捗度を報告そして課題をこなす作業を繰り返した。その結果、学内で実施されたTOEIC試験において目標としていた500点を超える、550点のスコアを獲得する学生もあり、成果があったと思われる。

・2011年2月の「カナダUBC海外教育研修」に参加する学生のため、2月22日10:40から12:10までZ号館12演習室において、特任講師による事前英会話実践プログラムを開催した。UBCのELI(English Language Institute)のプログラムを解説したDVDを用いながら、有意義な語学留学が果たせるよう情報提供と実践的な英会話の特訓が行われた。海外研修に参加する8名の学生のうち、4名の参加があり、目的を持って英語を話すという実践的なプログラムを提供できたと考える。

6. 添付資料

なし

数理科学教育研究センター(ASセンター)は理工系の学部・学科において、共通基礎専門科目のうち、数学科目と物理・力学科目を担当している。数学関係科目としては、基礎解析・演習、微積分1・演習、微積分2・演習、微積分3、多変数の微積分、線形代数1、線形代数2、応用解析、確率・統計がある。また、物理・力学関係科目としては、物理学1・演習、物理学2、基礎物理学、力学1・演習、力学2、基礎力学、物理学・実験、熱学、現代物理学入門がある。

このうち、数学関係科目は学部・学科によらないほぼ統一的な科目配置を行っているが、物理関係科目は学部・学科の特色に応じた科目配置になっている。これは、理工系の学部・学科に共通な基礎数学の習得を目指していることと、専門科目とのつながりを考慮した物理・力学の学習を目指していることによる。

これらの科目群は、本来的には、工学部・情報通信工学部などの工学系学部の共通科目として設置されている科目であるが、四条畷の学部・学科に対しても個々の学科の要望により上記科目の内その一部を提供している。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

A. 数学関係科目

本学数学教育科目における第1の目的は、専門科目を修得するために必要な数学的表現を理解し定理や公式を運用出来るようにすることである。特に理工系の学生が学ぶべき数学の基礎的事項である微分積分学や線形代数学は完成度の高い、整備されたものであるから、これらを習得させることは、各学科の専門における物理学および工学系科目の履修・修得に供することにつながり、重要な目標となる。さらに、2年次で開講している「応用解析」「微積分3」「確率・統計」などはより直接的に専門科目と関わっていることは言うまでもない。

第2の目的は、数学教員免許取得希望者や卒業研究において数学を希望する学生、あるいはより高度な数学を必要とする大学院進学希望者に対し、それぞれの目的に応じて数学の諸分野の知識を身に付けさせることである。

第3の目的は、間接的なものであるが、数学が本来的にもっている論理的整合性や合理性に慣れ親しませることである。このことは、単に手段としての数学知識を習得するためだけでなく、数学的なものの考え方を身に付けることにより、広くこの世界を理解し、社会生活を送るための重要な糧につながる。

上記の目標に従い、初年次生に提供される微積分関係科目(基礎解析・演習、微積分1・演習、微積分2・演習)と線形代数関係科目(線形代数1、線形代数2)を特に重要度の高い科目と位置づけている。すなわち、従来のようにいきなり微積分から始めるのではなく、入学してくる学生に応じて、三角関数や指数・対数関数の理解を十分に行ってから微積分の修得を目指すシステムを取り入れている(基礎解析・演習)。さらに、微積分1・演習においても上記基本関数の復習を行ってから、関数の極限計算、導関数の計算へと進む。このことにより、微積分1・演習においては、通例不定積分の計算までが目標となる。したがって、微積分2・演習(あるいはダイジェスト版である多変数の微積分)

では、1変数の積分を復習しながら多変数の微積分に入ることになっている。

また、線形代数においては、いきなり概念的な項目から始めるのではなく、線形代数1では(行列の基本変形や行列式の計算など)計算方法の習得をメインにしたシラバスになっている。これにより、線形代数の基本的な目標である線形変換や固有値・固有ベクトル・行列の対角化(線形代数2)の習得にスムーズに入れるよう工夫している。

B. 物理・力学関係科目

「力学1・演習」「物理学1・演習」など講義科目

力学・物理学関連の基礎専門科目の目標は、物理学の基礎について正確な知識を授け、日常の現象に対して物理学的な見方を養い、関連する専門科目の学習への意欲と能力を育てることである。

近年、ますます顕著になってきている新入生の学力レベルの格差への対策として、「力学」「物理学」において導入されている習熟度別クラスによる講義・演習は今年度で11年目を迎えている。この間、学力レベルに格差のある学生に対する教育の実践に努め、ある程度の教育効果を得ることができた。これまでの成果に基づき、カリキュラムの改訂が検討され、2011年度からは新カリキュラムが開始される。

2006 - 2010年度に実施されたカリキュラムの特徴は、各学科に配置された1年次前期・後期の力学・物理学科目を学科の特徴を生かしたコースに分けたこと、2年次前期にさらに進んだ内容(アドバンス)の講義を用意したことである。これは、これまでの基礎専門科目はいわゆる古典物理学の範囲に限られており、現代物理学に関する内容を教授する機会は全くなかったが、現代物理学(量子論・相対論を含む)は最先端科学の基礎であり、本来工学部在学中にどこかの講義で扱うべき項目であるという考えに基づいている。学科、コース毎に纏めたカリキュラムを以下の表に示す。

表 2006 - 2010年度カリキュラム

学科	1年前期	1年後期	2年前期
EGF	物理学1・演習[2コマ連続]	物理学2 物理学・実験	EG現代物理学入門
JH	力学1・演習[2コマ連続] 物理学・実験	力学2 基礎物理学	J熱学
ZN	力学1・演習[2コマ連続]	基礎物理学 N力学2 物理学・実験	N熱学 N現代物理学入門[後期]
P	基礎力学	基礎物理学	
L	力学1・演習[2コマ連続]	力学2 基礎物理学	医用物理学
S	力学1・演習[2コマ連続]	基礎物理学	

印は習熟度別クラス編成科目

「物理学・実験」

「物理学・実験」は、物理現象との接触を通して原理の理解を深めながら、工学諸分野を専攻する

のに不可欠な基本的実験操作や測定値処理法の習得を目的としており、工学部(EGHJN(Zを除く))および情報通信工学部の通信工学科(F)では必修科目である。環境技術学科(Z)も必修ではないが、学科の方針として強く受講を勧めているので、ほとんどの学生が受講している。また、誰が読んでもわかるレポートの作成も重要な課題の一つである。

力学、物性、熱学、光学に関する実験課題が10テーマ以上用意されている。2007年度までは最初の3週間は座学により、誤差論の講義や、基本的測定器の実習およびグラフの書き方の説明などにあて、残り12週で10テーマの実験課題を実施してきた。2008年度はレポートの書き方の指導を徹底するために、最初の3週間が終了して実験が始ってからの3テーマはレポート指導日とその実験テーマの次週に配置した。また、2009年度からはレポート負担の軽減及びレポート指導を徹底するために、最初の4回を座学に、さらに全ての実験テーマにレポート指導日を配置することにして進めている。これにより、レポートの不提出による単位の不認定が大幅に減少した。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

A. 数学関係科目

現在、入学してくる学生の基礎学力の不足と多様化が問題になっている。最近の指導要領の改訂により益々この傾向が強くなっている。このことは本学に限らず全国的な現象として知られているところである。この問題に対応するため、当センターにおいても2000年度から取り組んできた。数学においては、微積関係科目と線形代数の科目を1年次の重要科目ととらえ、特に多くの学生が苦手とする解析関係科目についてコース制を導入した。従来からの微積分関係科目に加え、新たに基礎解析・演習を1年次の前期に設け後期から微積分の科目を修得するコースを新たに設けた。これにより、高校生の段階で、特に指数・対数関数や三角関数の理解や運用が不十分な学生に対応できることになった。

4月はじめに行うプレイメントテストによって、いくつかの学科をグループとしてクラス分けを行い、上記の基礎解析・演習からスタートするクラスと従来からの微積分1・演習からスタートするクラスが平行して走ることになった。(資料:2010年度クラス分け結果(数学))

複数学科を4～5のクラスに分けて、学生の習熟度に応じて基礎解析・演習クラスと微積分1・演習クラスが平行に置かれている。各クラスの教授陣は連絡を密にして、授業の進度、講義や演習の工夫などの情報交換を行っている。さらに、クラスによる不公平感がないよう合格率に大きな差が生じないように努めている。2010年度における、1年次前期科目の基礎解析・演習や微積分1・演習の合格率はおよそ80%～85%、線形代数1の合格率も同様な数値になっている。1年次後期科目については、授業内容が難しくなることと受講生の授業への取り組む姿勢に差異がみとめられ、合格率は(前期と比較して)若干低くなる。この点については、受講生のモチベーションを常に持たせるよう授業における更なる工夫を心掛けねばならない。

さらに1年次の後期には基礎解析・演習および線形代数1の再履修クラスを設けて初年次生に手厚く対応している。この再履修クラスにおいてはテーマを絞り、演習をより多く取り入れて学生の達成感を重視している。また、少人数クラスの特典を活かして出来る限り個別対応に努めている。

今年度は、前期成績が出揃った段階で、各学科に基礎解析・演習の成績を配布した。このとは、特に数学を苦手とする学生を把握してもらい、各学科による学生への手厚い対応を期待するもので

ある。また、不合格者に対しては後期履修科目の指導をきめ細かくやって頂くためでもある。

数学関係科目の教授陣は24数名であるが、このうち非常勤講師が約15名である。日常的には電子メールで情報交換を行い、特に習得の難しい学生への対応などについて意見交換している。また、学期末には全員が集まり当該年度の授業の問題点やシラバス、翌年度の授業について議論し、さらに評価の統一性も図っている。

B. 物理・力学関係科目

1. 習熟度別クラスによる「力学1・演習」「物理学1・演習」など

習熟度別クラス分けは、2000年度に導入された。現在の習熟度の判定は、入学時の新入生全員を対象にした「数学プレースメント・テスト」の結果と、高等学校における物理学の履修状況アンケートに基づいており、運営の上では十分に機能している。一方で、高校で物理学を学んでいない学生が数多く入学してくることを考慮すると、現時点では物理学の出題によるプレースメント・テストのみでは対応できないと思われる。

機械系学科(HJ)や環境・サイエンス系学科(ZN)の「力学1・演習」(標準クラス)では、高校時代に物理学をある程度学んできている学生が多いため、従来のスタイルで講義を行うことが可能であった。しかし、「円運動」や「単振動」の理解は、標準クラスの学生においても困難で、ほとんどのクラスでは「単振動」は後期の「基礎物理学」に委ねている。さらに、「力学1・演習」(初歩クラス)では、物理学を学ぶ以前に、数学的な取り扱いができない学生が急増していることが目立っている。文字式の扱い、1次方程式、連立方程式、関数とグラフ(1次関数、2次関数)など、質点の運動を理解するために必要な数学的な知識を復習しながら進めていかねばならない状況である。

電気・物質系学科(EGF)の「物理学1・演習」,「物理学2」(振動・波動)はこれまでの「力学1・演習」「力学2」「基礎物理学」によるコースから、力学と同じレベルで振動・波動も演習を行い、この習熟度を高められることを目的として運営されてきた。力学・物理学関連の全時間数を減らして学生の負担を軽減するとともに、専門分野で必要になる基礎的な内容に重点を置いて教授することが狙いであった。しかし、振動・波動の理解は容易ではなく、効果的な教授法の模索が続けられている。

四条畷キャンパスの医療福祉工学部では、医療福祉工学科(L)と健康スポーツ科学科(S)の「力学1・演習」を当初は習熟度別による合併2クラス編成で行っていたが、2009年度からは各学科別の1クラス毎に変更して実施している。現状では十分な教育効果を期待できない点もあり、カリキュラムの見直しが早急に望まれる。

習熟度別によるクラス編成は、クラス内の学力レベルの格差が抑えられているので、少なくとも学生の状況に合わせた授業運営が可能であり、授業に対する学生の満足度を高めるとともに、講義を進めやすい環境を教員側に提供して精神的な負担を軽減させている。現状では「高校の数学」の基礎がある程度マスターできていれば、2コマ連続の授業でゆっくりと演習を進める現在の授業で、物理学・力学の基礎を習得することは可能なようである。その結果、定期試験を受験した80%近くの学生が単位を取得できている。しかし、学生の学力レベルを授業に対する理解度の現状から判断すると、進級するごとに学力レベルの格差が拡大していくことは避けられないと思われる。この習熟度別クラス編成は、すでに10年をこえる実績があるが、今後ともこの経験と蓄積を生かした幅広く柔軟な教育システムのもと、多様な教育観を持って運営していくことが必要であろう。

2. 「物理学・実験」

「物理学・実験」については、2006年度から、工学部各学科の定員が10～20名減少した関係で、定員の大きい学科も2クラスに分けず1クラスで指導する体制に変更した。指導する教員の数も学科の定員に合わせて減らし、5名ないし3名体制にした。この年は、実験は終了したがレポートを出さない学生が急増した年でもあった。このため、レポートをより書きやすくする必要に迫られ、実施する実験テーマを代え、実験指導書の全面書き換えを行った。2006年度は最初の1テーマだけ実験日の翌週をレポート指導日に当て、さらに、最後の実験日を実験予備日としてレポート未提出者の救済に当てた。レポート指導日の有効性が認められることから、2007年度はレポート指導日を最初の3回の実験テーマについて実施することにした。(1)レポートに対する負担の軽減とレポート指導の徹底、(2)これまで、他の講義時間中に実験レポートを書く学生が多くて授業に差し障りがあるという批判があったが、これらに答えるものであることが期待された。さらにもう一歩進めて、2009年度は、全テーマについて指導日をもうけることにした。各人が履修するテーマ数に関しては、2007年度は8テーマ、2009年度から5～6テーマになったが、レポート指導の充実、測定器の実習、グラフの書き方など特別な時間を設け十分時間をかけて指導することができるようになった。

3. 再履修クラス

教員及び受講する学生の努力にもかかわらず、合格ラインに達しない学生が出ることはやむをえない。高校時代に物理学をほとんど学んだことのない学生にとって、繰り返し時間をかけて勉強することは必要であろう。すなわち、1年次前期に開講されており、基幹科目でもある「力学1・演習」「物理学1・演習」においては、1年次後期に「(再)力学1・演習」「(再)物理学1・演習」を配置し、セメスター制の完全実施によって、前期に単位が取得できなかった学生でも後期の再履修クラスに履修登録をして再度学習できるようにした。2010年度も同様な意図で再履修クラスは開講されている。再履修クラスを充実させることで、学生が何度でも再履修することができる環境を整え、合格ラインを下げることなく教育できることを目指している。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

A. 数学関係科目

以前に行っていたオフィスアワーは、実効性が見いだせなかったもので、今のところ行っていない。数学教員の多くは寝屋川学舎R号館1階に研究室をもっているため、質問等はそこに行くよう学生に周知している。また、教員は時間の許す限り学生の質問に応じるよう、お互いに申し合わせている。実際に、ほぼ毎日どこかの研究室で学生が質問している光景が見られている。

別に、毎週月曜と火曜に開かれているコラボカフェをアナウンスして、教員に質問しにくいときは、これを利用するよう促している。

B. 物理・力学関係科目

特になし。

4. 卒業研究指導について

本年度より基礎理工学科の卒研指導がスタートした。したがってASセンターとしての卒研はそちらに組み込まれることになった。詳細は基礎理工学科の該当する項を参照されたい。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

学部・学科の共通基礎専門科目を担当する側からいくつかの問題点を指摘しておきたい。1つは、工学系の学生が身に付けておくべきミニマムスタンダードを統一的に教授するためにさまざまな工夫を行っているが、この数年は各学科の独自性が優先されつつあり、たとえば線形代数1を配置しながらそれにつづく線形代数2は配置されないなど当センターの意図が十分に活かされないカリキュラムが見受けられる。学部・学科の共通基礎専門科目に対する全学的な位置づけ、制度化が望まれる。

第2の問題は、四条畷で開講しているいくつかの科目についてである。上記のような我々の意図とは別に、提供している科目を学科個々の思惑で切り売りのように配置されている側面が見受けられる。たとえば、基礎解析・演習の再履修クラスが設けられていないことや、学科にとってふさわしくない(大半の学生にとって習得困難な)数学科目を配置している場面などが見受けられる。四条畷の学部・学科と共通基礎専門科目を提供する組織との調整機関の設置が望まれる。

6. 添付資料

1. 資料1 2010年度クラス分け結果(数学)

2010年度クラスわけ結果(数学)

EGHJNZPFLYS 合計

938

解析系 繰形代数
Check 938 789

基礎解析・微分積分

基礎解析の学生数	微積の学生数
EHN	50
A-1	0
A-2	0
A-3	32
B	18
251	50
GJZ	91
A-1	0
A-2	10
A-3	61
B	20
256	91
PF	91
A-1	0
A-2	17
A-3	0
B-1	22
B-2	0
274	91
LS	78
A-1	0
A-2	33
A-3	0
B	0
157	78
繰形代数	単純に等分した
EJ	94
S-1	0
S-2	28
S-3	66
200	94
HF	91
S-1	0
S-2	29
S-3	62
188	91
NZ	91
S-1	0
S-2	70
141	91
P	183
S-1	61
S-2	62
S-3	60
183	183
L	79
S	79
要項川計	265
516	265
統計	308
630	308

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

「電子工学科」から「電気電子工学科」へ名称変更したことに伴い、世の中で重要なキーワードとなっている環境・エネルギーの分野を考慮して、省エネに貢献する電気系技術の講義や実験・演習を新設・改訂した。この効果は大きく、新入生のこれらの科目に対する期待は我々教員の想像をはるかに凌ぐものがある。これを一層推し進めるため、企業から講師を招いて企業連携講座を今年度は3講座新設し、全部で5講座の開設となった。この連携講座については、特に入学生募集にも大きな効果を挙げている。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

近年開講科目の見直し・整理が進む中で、講義の内容や難易度が科目により大きく異なる傾向がさらに強まっている。従って、出席を取る、毎回宿題を課して自宅学習を促す、模範解答を配らずに考え方・やり方の解説を徹底する、など科目ごとに教員が多彩な工夫を凝らしている。他方学生から見ると、宿題の有無などそれぞれの講義への対応が講義ごとに異なり、成績評価方法も異なっているため、まごつくことが多いようである。シラバスに成績評価方法を文章で記載するだけでなく、初回の授業でその講義を受講するために必要な心構えや、教員が受講生に求める事項を改めて口頭で伝えることに十分な時間を割くガイダンスの必要性が増している。

授業アンケート結果を講義へ反映させる手法について:前項に記したように、理解の難易度が講義により大きく異なるため、受講生からの要望も講義ごとに大きく異なる。例えば「宿題を減らしてほしい」という要望を、単純に学科内の総ての科目に当て嵌めることは妥当ではない。従って、アンケート結果は各講義ごとに担当教員が個別対応しており、学科全体で共通の対処は今のところ行っていない。また正式なアンケート形式では、率直な感想や意見をストレートに述べられない受講生が多く、むしろ全員が集まる学科入門科目などの終了時に、複数の学生が(別の科目に関する)意見を口頭で訴えてくる事が多い。学生の本音をどのように吸い上げるか、その手法については一層の工夫が必要であろう。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

学科基幹科目である基礎電磁気学・演習や電気数学への出席状況・小テストの成績は定期的に全教員に情報公開・共有し、欠席学生・成績不振学生について、電気電子工学ゼミナールの時間を活用して早期に指導している。学科行事などの案内やキャリア支援講座などへの勧誘も全員が集まる工学基礎実験の際に口頭で話をするように努めており、積極的な大学生活を送るよう指導することは成功していると考えている。色々な意味で問題を起こす学生もあらわれているが、周囲の学生は比較的暖かく見守っており、問題解決に協力してくれることも多い。このような人間味あふれる学生が多いことは、本学の優れた点ではなからうか。

4. 卒業研究指導について

産学連携講座として産業界の第一線の技術者による、現場の生きた技術内容を講義してもらうことも、卒業研究に向けた興味付けと学生の自己目標設定に大きな寄与を果たすであろう。

卒業研究を実施する研究室に配属決定方法を今回改めた。従来は学科の全研究室への希望順位を学生に提出させ、1回の作業で第1志望から決定していたため、人気のある数研究室を上位に挙げると、どの研究室も満杯になり、結果的に自分が下位に挙げた研究室に配属されてしまう事例が少なからずあった。これを克服するため、1回目は単なる希望調査とし、学生が自主的に希望先を変更して特定の研究室に過度に希望が集中しないよう対策をとった。感情的には学生の不満は減ったようであるが、希望の集中は解消されておらず、希望順位の下位に配属された学生も数名いるのが実情である。

卒業研究の指導方法については、担当教員それぞれによって取り組み方は異なっている。基本的には、学生一人一人の個性を活かすことを念頭に置き、研究課題の決定には本人と直接面談して本人の適正や能力に応じて決定する場合が多い。就職活動で公欠となる場合もあるが、週1回のゼミ発表会を行い、全員が質問やコメントなどを行うように指導して、仲間との協調性を養い、自らの成長を自覚させる指導を心がけている。多くの研究室では年度の途中で中間発表会を開催し、かなりの時間をかけて集中して発表資料を準備させる。これは大きな仕事を計画性をもって実行する練習となり、大きな効果を生んでいる。うまく発表できたことで、学生は自信をもち、「仕事のやりがい」について考えるよい機会にもなっている。

就職への対応:就職状況の悪化に対応すべく、就職指導は3年後期のプレゼミから継続して力を入れている。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

学科名称変更に伴うカリキュラム改訂は、学生には高い評価を受けている。「エネルギー」、「環境」を考慮した電気系科目の追加は、学生が自己目標を設定し、社会で如何に活躍するかを考える上で貴重な基盤をなすものと期待できよう。

6. 添付資料

なし

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

2009年度より，化学系学科としての学科イメージをより明確にするためエレクトロニクス材料系科目の一部を廃止し，化学系科目を充実させた新カリキュラムをスタートさせた。新カリキュラムでは，教養化学系科目として，化学史，化学と生活，化学と安全，化学と倫理，化学と産業，及び化学と英語，材料系科目として，ナノ化学，超分子化学，及び錯体化学，生命科学系科目として，生物，生体機能化学，及び食品化学を新設した。さらに，化学実験系科目として，1年次前期に生活化学実験，2年次前期・後期に化学実験1・2，3年次前期・後期に応用化学実験1・2・3・4を配当し，化学実験技術の修得を充実させた。このように化学系科目を新設することにより，本学科の教育目標を明確にした。

2. 教育改善や授業点検，成績評価について

カリキュラム変更により教育目標を明確にし，教育改善を図っているが，2年間が経過した段階では専門教育科目をいまだ十分に教育しておらず現段階での教育改善の評価は甚だ困難である。応用化学科教員の授業アンケート実施率は大学平均よりも高く，各教員は授業点検に努力している。また，学生からの改善要望に対しても真摯に対応している。各教員は成績評価方法を授業開始時に学生に説明し，シラバスにも明示しているので，成績に対する疑義はこれまで寄せられたことはない。Moodleを利用したe-ラーニングを一部科目に導入し，講義内容の到達度確認や学生自身の成長の確認に役立てた。

3. 学生指導について

年度初めの履修登録前に，各学年学生への履修ガイダンスを充分に実施しており，特に履修指導に関して問題点は認められない。応用化学科では，2008年度より学外教育合宿研修を実施している。2010年度は研修方法・場所を変更し，1日目の午前に将来関係する可能性の高い化学系工場の見学を取り入れ，午後から翌日の午後までは寝屋川市野外教育センターにて合宿研修及び新入生歓迎会を実施した。新入生の大学生活への適応をスムーズに行ない，かつ新入生間の親睦を促進する効果は顕著である。さらに，大学院生や卒研生も多数参加し，新入生との親睦をはかるとともに，新入生への種々のアドバイスをこなしてくれている。

4. 卒業研究指導について

各研究室に分かれ，各自のテーマにそって卒業研究を実施している。応用化学科では卒業研究の進捗状況を各自が点検し，今後の研究計画を修正するために，夏季休暇の前後に数研究室が合同で中間報告会を実施している。就職活動時期の長期化に伴い，卒業研究に費やせる時間が制限されるようであるが，それなりの成果が挙げられるように指導に苦慮している。

5．その他，特記事項など

資格取得支援のために，通常の授業以外に公害防止管理者・第三種電気主任技術者等の支援講座を数名の教員がボランティアで開講している。2010年度も多くの受講学生が資格取得だけでなく，科目合格を果たしている。継続して受講することにより資格取得が可能となることを期待している。その他，高大連携授業・出張授業・オープンキャンパス・テクノフェア・中学生サマーセミナー等に積極的に協力し大学広報に寄与している。

6．添付資料

特になし。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

ロボットに代表されるように、“機械を自在に操る”ためには、機械だけでなく、電気・電子、計測・制御、情報などの知識が必要で、この分野は「メカトロニクス」とよばれる。本学科は、このような電気と機械を融合した技術分野のエンジニアを育成することを目的とし、それに沿ったカリキュラムを構成している。シラバスに関しては授業内容15回分を具体的に記述し、評価方法も明記している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

各教員からの講義・演習のノウハウを集め、それらを教育WGで検討し、「講義にて実践して頂きたい事項」ならびに「講義にて参考にして頂きたい事項」をまとめ、教員の意識啓発を行っている。さらに、新カリキュラムでは導入科目として、「基礎工学」を教授し、専門科目へスムーズに移行できるように、教育改善に努めている。成績評価に関しては、期末のテストのみではなく、複数回の中間テストや出席など総合的に評価を行なっている。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

1年生から3年生は、各学年10名程度の学生を各教員の担任とし、年2回の成績配布時に履修指導や教育相談を行なっている。また、1年時における「キャリア入門」においてはグループ担任が各学生を担当し、学生との意思の疎通をはかっている。就職指導に関しては、学生は3年後期から各研究室に所属するため、プレゼミナールおよび卒業研究を通じて、卒研指導教員が個別に行っている。

4. 卒業研究指導について

3年生は後期から各卒研室に配属となり、早くから卒業研究に接することにより教育・研究に対する動機付けを行なっている。また、卒研生は1年間の成果を卒業研究発表会で口頭発表するとともに卒業論文としてまとめることが義務付けされている。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

演習・実験科目において、図面やレポートのチェックを厳しく行ない、再提出させることにより理解が深まるように努めている。

6. 添付資料 無し

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

講義に対応した演習を重視している。基礎力の充実を図る目的で演習科目を多く設けている。これらの科目では学生自ら課題に取り組み確実に理解させることを目指している。また、小テストや演習の評価を行っている。シラバスでは目標を明確にしている。

講義	演習	講義	演習
工業力学および演習1 2クラスに分け少人数教育としている		工業力学および演習2	
材料力学1	材料力学1演習	材料力学2	材料力学2演習
熱工学1	熱工学演習	流体力学1	流体力学演習
機械力学1	機械力学演習	機械運動学1	機械運動学演習
制御工学1	制御工学演習	機械要素設計1, 2	機械要素設計演習
CAD製図(2次元) 2クラスに分けて教育	CAD実習(3次元) 2クラスに分けて教育	機械設計製図演習 2クラスに分けて教育	

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

各教員が学生に理解しやすい授業を心掛けている。小試験やレポートを課す科目も多い。科目によっては、再評価を行い、学生にやり直しの機会を与え、内容の理解を深めさせるようにしている。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

各学年ともグループ担任制度を設け、密な指導を行っている。1年次生には5月に新入生歓迎会を行い、履修指導、生活指導を行うとともに、キャリア入門の中に基礎ゼミナールを設け、基礎学力の向上を図っている。2年次生にはキャリア授業を通じて、3年次生にはプレインターンシップゼミナールを通じて就職指導を行っている。

4. 卒業研究指導について

学生の希望を最大限配慮し、研究室への配属を行い、丁寧な研究指導を行っている。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

- 1) 機械設計技術者3級試験の合格支援に学科の全教員が取り組んでいる(3年次生以上)。
- 2) CAD利用技術者試験の合格支援を行っている。社会で最も利用されている3次元CADシステム(CATIA)を用いて、充実した3次元CAD教育を行っている。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

機械工学・電気工学の知識を基礎にし, 環境問題に取り組み解決できる能力を有する技術者養成を目標にしている。環境・機械・電気の分野の知識を習得し, 幅広い工学知識をもち, 問題解決能力をもつことができるよう配慮している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

授業アンケートの結果を参考にし, 授業点検を行い授業改善に努めている。成績評価は, 期末試験以外に, 授業時に随時行う演習問題の評価や出席状況を考慮している。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

前後期の成績配付時に, 履修指導や教育相談をしている。学生相談に対しては, クラス担任がクラスの学生の相談に当たり, 必要に応じて学生相談室アドバイザーに相談し, 学科会議にフィードバックし対応している。

4. 卒業研究指導について

3年生後期に配当されている「プレゼミナール」では少人数にグループ分けし, 卒研担当教員が研究内容および卒研テーマを説明し, 卒業研究を行うため必要な基礎教育を行い, 4年次において迅速に卒業研究に着手できることを目指している。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

演習・実験科目に対しては, レポートを厳しくチェックし, 内容を良く理解し書くよう指示している。

また, 環境に関連する各種資格(環境社会検定試験(エコ検定), 気象予報士, C A D利用技術者試験, エネルギー管理士など)を修得できるよう支援し, ゼミナールなどを実施している。

6. 添付資料

なし

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

・各学年で, 実験・ゼミを充実させ, きめ細かい指導ができるようにした。特に, 2年生向けの「基礎理工学ゼミナール1・2」では, 基礎的な数学と物理学について学生各自の習熟度と興味にあわせてクラスを編成し, 基礎学力の強化と個性を伸ばす教育を試みた。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

・1年生向けの「基礎理工学入門」に関して, できるだけ担当以外の教員も出席するようにした。また, 2, 3年生のボランティアが手伝うこともあった。

・1年生向けの「基礎ゼミナール1・2」は, プレースメントテストや入試成績などによる習熟度に基づいてクラス編成を行い, グループ担任・副担任が担当した。学生の大学生活への適応と学力の向上を目標に, 担当者グループ会議を開いて学生の状況を的確に把握しながら進めた。

・2年生向けの「基礎理工学ゼミナール1・2」では, これまでの成績や履修状況に基づいてクラス編成を行い, 成績の評価など担当者間で相談を行いながら運営した。

・「物理学と先端技術」等のリレー講義や, 「応用サイエンス実験」等の専門的実験科目においては, 担当者会議を適宜開いて状況を把握しながら進めた。

・3年次の専門科目におけるコース(数理モデリングコース, 科学計測コース)において, 関連する科目間で連携して進めた。(数学: 「数理モデリング」, 「数理モデリングゼミナール」, 「シミュレーション基礎」など。科学計測: 「計測・データ処理1・2」, 「シミュレーション工学」, 「応用サイエンス実験」, 「科学計測ゼミナール」など。)

・カリキュラム検討WGを設置し, これまでの教育実践経験と総括を踏まえて, より効果的な新カリキュラムを検討・作成した。この新カリキュラムは平成23年度より開始予定である。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

・学科会議では, 欠席など気になる学生についての情報交換を行ってきた。必要なら担任・副担任などが学生に連絡を取るなど迅速に対応した。

・3月に平成23年度に向けた学年別の学科ガイダンスを行い, カリキュラムの基本的な考え方を繰り返し説明するとともに, 履修モデルや履修上の注意を知らせた。また, 基礎理工学科の1週間が分かるように(教職科目との関連も分かるように), 学科の時間割を作成して, 学生に配布した。

・留年生や単位不足と思われる学生に対して, 履修登録や就学上のアドバイスを適宜行った。

4. 卒業研究指導について

・今年度初めての4年次生を迎え, 卒業研究が行われた。きめ細かな指導を行ない, 学科内でも連携をとりながら卒業研究が円滑に進められた。一方で, 研究室配属の手続きや発表会の実施方法など改善していく必要があり, さらに検討していく。

・本学科は数学・理科の教員養成を柱の一つとしており, 教員志望の学生に対するサポートも毎年

継続して行ってきた。平成22年度卒業生のうち、教員採用試験に合格し教諭として採用された学生が1名、常勤講師として採用された学生が3名であり、教員志望の学生に対するサポートは一定の成果をあげたと考えられる。一方、企業への就職を目指す学生に対しては、就職課と連携しながら進路やSPI対策、エントリーシート・面接などのアドバイスを行い就職活動の支援に努めたが、活動状況は学生によってばらつきが見られた。平成23年度に向けて、さらに多くの学生が3年次の早い時期から就職活動が行えるように指導していく必要がある。

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)

・西はりま天文台宿泊研修やエッグドロップコンテストなど、新入生に対して学科の特徴を生かした歓迎行事を行った。独創性やプレゼンテーション能力を向上させるよい機会として定着してきた。また2・3年生の有志も参加し、企画の運営・進行に携わるなど、先輩による新入生を歓迎する雰囲気も出来つつある。

・複数のテレビ局や新聞社からエッグドロップの取材を受け、学生や事務局の協力を得て対応することができた。また高校や中学校などからの問い合わせもあった。これらは本学や基礎理工学科の広報宣伝活動にも貢献できたと思われる。

・オープンキャンパス、テクノフェアや体験授業等のアシスタントとして、学生ボランティアの参加を積極的に呼びかけた。参加した学生には、科学の楽しさを伝える技術と経験を深める機会となった。また、さまざまな企画を通じて、学年間の交流の場となるように努めた。

以上

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

情報工学科の教育目標は以下の通りである:

「情報」は、「物質」や「エネルギー」と同じく、現代社会の中で大変重要な役割を果たしている。「情報」を扱うためには、多くのツールの応用が必要である。これらのツールや手法を習得し、また、それらに関する知識を次の世代に伝える学問分野が「情報工学」分野である。情報工学科の教育目標は「情報工学」分野の基礎知識および専門知識を、情報工学科の学生達に教えることである。そのために、情報工学科のカリキュラムは1、2年時に基盤的専門知識を対象にする科目を提供し、3、4年次に専門知識を対象にする科目を幅広く提供している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

平成23年度から新カリキュラムに移行することから、情報工学科の教育方針および開講科目の見直しを、学科担当委員6名で作成し、学科会議で何度も議論した。教育方針はおおむね適切であるという意見が多かったが、弱点も指摘された。特に、学科指定パソコンの利用が、アプリケーションの利用に止まり、パソコン内部情報の書換え、設定ファイルの変更など、専門性を有する使い方を習得できていないことが問題として挙げた。そこで次年度より、入学後直ぐの集中講義で、配布したパソコンの全ファイルをバックアップさせ、全ての設定とアプリケーションのインストールを各自で設定することで、パソコン内部情報を各自の責任で書換えができ、間違えて書換えた場合も、バックアップから以前の状態に復帰できるように指導することにした。この科目の受講によって、初年度からパソコンの扱いに慣れることで、パソコン内部情報の専門性を持たせることが可能であると考えている。また、開講科目で非常勤講師担当による科目を減らすため、複数科目を統廃合し、学生に分かり易く、内容に沿った科目名になるように変更した。

情報工学科は、自由選択制を取っており、実験等の数少ない科目以外の専門科目は全て選択制で、学生にとって興味ある、卒業後に必要な科目に絞ることが可能である。実施した試験における成績評価はバランスが取れ、大きな問題は存在していないと判断している。学生からも、不公平な判断に起因する不満の声はなかった。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

履修指導や教育相談は、学科の教員全員が行っており、現在まで問題は起こっていない。就職指導は主に卒業研究生を対象に、学科の二人の就職担当者の教員の支援を受けながら、それぞれの研究室別で行った。これに加えて、(株)OVO(オーヴ オ)社に委託し、学部3年生および大

学院M1生を対象とした就職指導を行った。指導内容は、「就職活動で内定を得る心構えと対策」であり、多くの学生が出席した。

4. 卒業研究指導について

卒業研究指導を例年どおりに行った。大きな問題はなかったが、今年の就職活動がかなり困難であったため、多くの学生が卒業研究に集中することが難しかった。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

必修である電子基礎実験・情報工学実験では、レポートの体裁・内容が不十分な場合、再提出を課し、内容が揃うまで何度も再提出を繰り返している。これによって、4年次の卒業論文記述および就職後の社内レポート記述に繋がる訓練を行っている。

6. 添付資料

特になし。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

(1) 教育目標に関する学科3方針(下記)を策定している。

- ・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー(DP))
- ・教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー(CP))
- ・入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー(AP))

(2) 平成23年度から始まる新カリキュラム策定に関する学科の基本方針(案)をまとめた。

- ・キャリア(職業)に対してできるだけ早い段階から意識づけを行うため、2010年度より、1,2年次生に対しても「キャリア教育」が新規に導入された。

1年次: 「大学適応と目標」(前期)、必修、0単位)

2年次: 「大学生活とキャリア」(前期)、必修、0単位)

内容: オリエンテーション(1回)、外部講師による職業指導(11回)、OB講演(2回)、まとめ(1回)

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

(1) 各科目・教員ごとに、個別に以下の教育改善を実施した。

- ・ 授業開始前に前回授業の重要点を板書しておき、その内容を説明してから授業を開始するようにした。
- ・ 最新の通信技術を取り入れた自作テキスト・プリントを使用し、講義に用いた。
- ・ 情報通信工学応用実験1・2では、無線・有線に係る通信計測技術やネットワーク技術を体系的に学ぶことができるような実施体制に整えた。
- ・ 工学基礎実験、情報通信工学実験1,2、情報通信工学応用実験1・2では、時間内に修了しない実験について、別時間帯においても追加実験ができるようにした。この場合、実験補助職員が指導する。
- ・ 3分割学習...90分間講義し続けると学生の集中力が持たないため、なるべく、授業を約30分ずつ【復習】【講義】【演習】に分けて行うようにした。
- ・ 演習による理解度の向上と把握...ほぼ毎回、演習や小テストを行い、理解度の向上を狙い、また、学生の理解度を把握するように努めた。
- ・ コンピュータ演習中の質問受付方法の改善...演習中、プログラムのエラーを見てほしいという質問が多く、各学生が質問した順番の把握が困難だったので、【質問受付webアプリケーション】を作成し、申込順に回答できるようにした。
- ・ ムードルを用いたeラーニングによる自宅学習を行った。
- ・ 自作教材による授業...市販教科書はレベルが高く、消化不良になることが多いため、自作テキストやプリントを使用した。

- ・ パソコン・ネットワーク・アプリの使用...パソコンを用いてスクリーンに画面を投影し、スライド、WEB、アプリケーションソフトなどを用いて、できるだけ興味深く、直感的に理解できるように工夫した。
- ・ アニメーションによるビジュアルな説明...漫画・アニメ世代のせいか、活字が苦手な学生が多いので、PowerPoint や Keynote によるアニメーションを用いたビジュアルな説明を心がけた。

(2) 授業評価、成績評価など

- ・ PC、DS、携帯電話を使用する「授業アンケート」を実施し、「授業改善プラン」を作成した。
- ・ 積極的に発言する者に加点...授業中に手を挙げて発言することや、良い質問を行った学生に加点するようにし、積極性を育てるようにした。
- ・ 「教授要目の評価欄」に出席、小テスト、中間テスト、期末テストの評価点割合を明記した。

3. 学生指導(履修指導や教育相談,生活相談,就職指導など)について

(1) 平成17年度より「グループ担任制」による学生指導を継続実施している。

各学年を学科専任教員が担当する9グループに分け、各グループの担当教員より、履修科目の指導、成績交付時の指導、生活全般の指導等、大学生生活全般にかかわる指導を行っている。

(2) 「GP学生支援推進プログラム」(適性検査およびフォローアップガイダンス等)の実施。

キャリア教育および人間形成のための教育支援の一環として、平成22度は2、3年次生を対象として以下のプログラムを実施した。

2年次生:「自己プログレスレポート」(適性検査)、「徹底活用ガイダンス」(フォローアップガイダンス)

3年次生:「就職適性検査」(適性検査)、「徹底活用ガイダンス」(フォローアップガイダンス)

4. 卒業研究指導について

(1) 平成20年度より「プレゼминаール」において、3年次生に対して卒業研究室別の事前卒業研究指導を継続実施している。

(2) 学生自身によるテーマ設定の実施(自主性尊重のため)。1研究室で実施中。

(3) 教員の価値観を明確に示す。学生に対して曖昧な態度をとらない。

5. その他,特記事項(学科独自の教育など)など

なし

6. 添付資料

なし

以上

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

「企業の求める人材の育成」を標榜するアセットマネジメント学科においては、学生の「仕事としての目的意識」形成が遅れ気味であることを考慮し、平成22年度、学科のコース選択を“緩やかに且幅広く”、実行してもいいようなカリキュラムの位置付けと各種特別講座の配置をおこない、コース選択の弾力化と多様化を図るようにしたことにより、後述するように資格取得の方向性に多様性がみられるようになってきた。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

「企業の求める人材」は「情報・知識を丸暗記する」詰め込み人間でなく、「自分で考え、論理的思考を行い、文章を作り、意思を伝達する(コミュニケーション能力)ことに自立している人間であり、このために参加型・能動的授業を更に進める。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

学生指導については、個々教員による少人数「個別担任方式を」改める。これは個々教員の指導方法によってかなり差が出る方法より、画一的・統一的な指導のほうが公平感があり、説得力があると判断したもの。平成22年度より「教員担当制」を導入し、学生指導については学年別総合カウンセリング担任を配置すると同時に、キャリアー担当、資格支援特別講座担当等機能別担当を配置した。その成果とし、教授会での情報交換に基づく早めの対応、また学部企画の各種施策(資格取得・履修・機能別担当制等)の機動性向上、更に授業出席・必修履修状況等について個別カウンセリングの機動的実行等出ている。

4. 卒業研究指導について

現在なし

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

大学時代の勉強を、客観的評価するものとして資格取得が大切であるが、本学科においては「資格取得支援体制」を導入した。成果として平成23年度にも入るが、大きな成果が出てきている。

証券アナリスト1次合格、FP2級、3級、簿記2級、3級等等である。

大学教育において「出口戦略(就職サポート体制)」は大きな評価要素であるが、平成22年度は、()アンケート反応企業訪問によるインターンシップ依頼()情報を要望している企業には、大学・学科パンフ、資産運用フォーラム等各種情報を提供する等の中期的接触を図り、多くのインターンシップ企業を確保できたと思っている。

また出口戦略担当教員を配置し、「学生の仕事としての目的意識から始まって、エントリーシートの書き方、面接の受け方等」の実践的個人別就職サポート体制を敷くが実際の行動は平成23年度からであることは言うまでもない。

6. 添付資料

なし

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

教育目標は、医用工学系はME 1種及び2種実力検定試験、臨床工学技士国家試験に合格すること、医療情報系は医療情報技師資格、福祉工学系は福祉産業分野でのエンジニアの養成を目標の一つとして明確化している。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

ME 1種及び2種実力検定試験や臨床工学技士国家試験の過去問をe-learningにて行い、成績向上、資格取得に役立てている。また、国家試験の直前には教員が分担して国家試験対策ゼミを分野別を実施し、合格率向上と維持に努力している。

数学と物理の基礎学力が低下傾向にあるので、3年生を対象にSPI対策としてUPO-NET導入を検討し、開始した。また、基礎学としての数学と物理がなぜ必要かを基礎専門科目との関連性を意識させて、所謂ブリッジカリキュラムを実施すること等が議論され、教員の担当科目の中で基礎学の重要さを意識させることを申し合わせ、実施している。

臨床工学技士（CE）をめざす学生の可能性をできる限り実現するために、3年次生を対象に、臨床工学技士国家試験の指定科目（実験，実習を除く）の中で不合格と判定された後，原則として2科目を限度として，再度，試験等を実施して合格ラインを超えたと判断された場合に合格とする再評価を継続して実施中である。また，修士課程に進学した学生がCEの資格を取得できるように，学部の実習科目履修生になることを特例として認め，今年度から実施した。

2012年度からの新カリキュラムの準備について検討を開始した。キャリア教育については、一年生前期の基礎ゼミナールを複数の学科教員で実施するために、医療福祉工学入門を充てることとした。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

1、2回生までは担任制にて履修指導、教育相談、生活相談を行っている。3回生では7月よりプレゼミとして研究室配属を行い、研究室単位で指導を行っている。また、就職指導では、就職意識を高めるために病院見学や企業見学を行い、さらに医師、臨床工学技士などの医療従事者や企業の方を招き講演会を開催している。

2010年3月卒業生の満足度アンケートでも理不尽な対応，理不尽な評価という記述が複数名あった。教員側が正当と思っても学生には理不尽と捉えられることもあるが，学生をディスカレッジする発言は厳禁とし，学生をエンカレッジする姿勢を徹底することを学科内で申し合わせた。特に，CE受験に直接関係する科目で留意することとし，指摘があっても改善されない場合は複数の教員による共同担当科目として共同で評価する，もしくは並列開講にする等の具体的な改善措置を実施することを申し合わせた。その後，該当事案が明確化したため学部長を中心に学科として学生対応の改善と信頼回復に取り組み，前記の申し合わせを実施するとともに，今後の再発防止と改善の対策を立て，その経過を文書で学長へ報告した。

4．卒業研究指導について

卒業研究指導は3回生前期より行い、12月に卒業研究発表会を全員参加の下で行っており、卒業研究発表会での質問事項、改善点に対して追及研究も行っている。さらに、病院、福祉現場等でのデータ収集を行い、医学系、生体医工学系、福祉工学系の各分野での学会発表・参加も積極的に行っている。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

本学科では、実学の重要性を低学年から理解するように、学休みに病院見学、企業見学を自主参加として行っているが、大変好評であり、学生の勉学意欲向上に大いに役立っている。また、心電図の勉強では高学年の学生が低学年に教えるなど、先輩から後輩への指導が定着し、病院では即戦力としての期待度が高く評価されている。同時に、先輩・後輩の関係を学ぶ人間形成にも役立っている。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

(ア) 教育目標の設定と説明

教育目標の設定については、学科会議において学科における確認を行っている。特に、最終目標である理学療法士国家試験合格レベルへの到達目標を達成する上での進級判定基準、単位認定基準の確認を励行している。

また、各科目の試験問題作成においても各教員の基準を統一するため、問題に国家試験の過去の問題を挿入することなどの取り決めを行っている。

(イ) カリキュラムの位置付け

入学時、新年度開始時におけるオリエンテーション期間に、その学年の各科目の階層性、有機的関連性を説明するばかりでなく、4年間のカリキュラム全体の中での位置づけなどを各学年ごとに説明している。

新入生については、教養科目の位置づけ、専門基礎科目の意義、位置づけを繰り返し説明し、専門性の概要を講義する理学療法概論の講義中にも臨床的事象を例にとって、解剖学、生理学、機能解剖学など同時進行している基礎専門科目の学習内容を具体的に列挙しその関係性を説明している。その他に、本学理学療法学科の特徴としての身体の工学的モデルの理解を各科目の中で取り入れ、卒業研究などへの関連づけを行っている。

新カリキュラムの編成に関しては、国家試験合格と臨床実習通過の目標を掲げ科目整理と追加を行った。また、1学年で履修する解剖学、生理学、運動学などの基礎専門科目と専門科目の関連付けを徹底する科目も追加し、臨床実習・国家試験準備への復習も兼ねて基礎知識の充実を目指した。

(ウ) シラバス

専門科目については、シラバスに各項目名を明示しても初学者に理解できない専門用語が出る場合、概略のみを示し、講義進行中の学生の反応や理解度を確認しながら進行計画を示す工夫を行っている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

定期的に、授業内容で、既習の事項の理解がなされていない場合、報告しその原因を分析し、繰り返し講義するなどの対策を講じている。

また、運動学などの専門科目で、領域を分け、運動学1、運動学2と分割している場合、定期試験の合格者や平均点のばらつきが出た場合など、試験のレベル、講義内容の

チェックを担当者同士で行っている。

国家試験準備に関して、精神的動揺や不安に対応するべく合同勉強会形式をとっている。これは、学年全員を国家試験当日と同様の時間配分で同一教室に入室させ、国家試験準備を行わせるものである。また、学内国試模擬試験を週1回実施し、不正解の問題の解消を目標として繰り返し、準備を行わせた。

当初の予想通り、この形式では落ち着いて勉強できないなどのクレームが出たが教員の統一見解として、国試直前までの準備形式として継続することを宣言し、理解させ継続させた。問題点は、時期的にインフルエンザなどの感染防止に注意が必要であった個々の研究室の備品の加湿器などを設置し予防に努めた。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

学生指導については、国家試験や総合臨床実習などの準備を十分に行えるよう研究室配属を3年時に行い、研究室指導教員が中心となって定期的に個人面談を行っている。

1年2年次に対しては、グループ担任が中心となって、面談を行っているが、教員によっては、担当講義が少ない学年があり、行き届かない面もあり、低学年の講義担当者がグループ担任に関わらず、講義中の態度、挙動などについて問題があると判断した場合は、学科会議などで逐次報告し担任、主任の対応へと引き継いでいる。その際、必要であれば、主任、担任の複数で学生と保護者に対する面談を行っており、さらには、学生相談室の相談員も交えた面談に至った例もある。学生相談室の活用に関しては、学生相談室からの報告にもある通り、学生数当たりの相談件数は本学科が突出しているが、単なる“丸投げ”にならないよう医務室担当者、相談室窓口担当者との連絡を密にするためにも学科会議などで個別対応状況の報告を励行している。

4. 卒業研究指導について

理学療法学科の特徴の一つであるが、業務守備範囲が広く多岐にわたる科目の総合的な理解の促進の為に、卒業研究を行っているが、臨床実習などで行われるケーススタディにもその役割を担わせており、両者が、最終学年の学生にとって過重な負担にならないよう卒業研究のレベルについて高すぎる目標設定にならないよう教員間の連絡を密にし指導している。最終学年が、総合臨床実習と国家試験準備に忙殺されることを考慮し、研究室配属を実質的に3年次とし卒業研究の作業を3年次でほぼ完了できるようにしてきたが、さらに、2年次後半へと配属時期を早め指導教員とのきめ細かい指導や、上級学年の研究生との交流からピアの指導が行き渡るよう変更している。

5. 特記事項

学科学生全員が理学療法士の国家試験受験資格取得が卒業要件となるため、臨床実習完了が必須条件となる特殊な事情がある。従って、基礎知識、基本的検査・治療技術など一般的知識の底上げに加え、基本的資質の涵養を教育目標の柱に挙げる必要がある。このため、論理的思考能力の習得は勿論のこと、コミュニケーション能力が患者や医療

専門職との良好な関係構築の必須条件となる。そのため挨拶の励行など日常の基本的な生活習慣の指導から行っている。当初は、視線を合わせることの少ない学生も臨床実習開始時には、アイコンタクトが十分行えるようになっている。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

健康スポーツ科学科は, 生涯を通じて国民の健康水準を保持・増進し, 健康づくりに寄与するため, 単に, スポーツ, 運動の能力を向上させるのみならず, 臨床医学・情報科学などをベースとした健康スポーツ科学について教授し, この分野の専門知識を有する技術者・指導者として活躍できる人材を育成することを目的としている。そして教育目標として以下のことを掲げてきた。

- (1) ストレスや生活習慣病などの健康問題や, 長寿社会での健康管理における運動(スポーツ)の役割と効果を学び, 総合ヘルスプロモーションを実現できる技術を習得する。
- (2) あらゆるスポーツを科学的に解析し, 一人ひとりに合わせた最適な運動プログラムの作成やトレーニング方法の実施など, 最大限の能力を発揮できる専門技術を習得する。
- (3) スポーツを理解し, 競技力向上に際しての専門的な知識を学び, 個々の年齢や性別, 技能レベルやニーズなどに合わせた指導方法を習得する。

これらを達成するためカリキュラムは, 「総合科目」, 「基礎専門科目」, 「専門科目」に大別され, 1年生から4年生まで系統的に学習できるように編成している。基礎専門科目では, 生体医工学の基礎となる数学や物理学, 生理学や解剖学の基礎となる生物学, 情報科学の基本であるコンピュタリテラシーやプログラミング基礎演習などを修得することを目指している。専門科目では, 基礎工学, 医学, スポーツ科学, 健康情報学, 健康運動指導学, スポーツ実技・健康づくり運動, スポーツ教育学等に配当された科目を修得し, 講義を通して知識を習得するとともに, 実技, 実習および演習を通して, 実践力, 指導力を養成することを目指す。進路支援として健康運動実践指導者, 健康運動指導士の資格を取得できるように, 健康・体力づくり事業財団の指定科目を1年生から3年生までに配当している。また, 保健体育の教員免許を取得できるように, 教職課程に関する科目も1年生から3年生までに配当している。また, 4年間で得た知識や身につけた能力を発揮し発表する場として卒業研究を必修科目とし, 卒業研究の発表, 卒業論文の作成を行うための個別指導を行う。

以上が現在のカリキュラムとその目的であるが, 学科設立3年をすぎ, 実際の学生達の学力や学習状況から, 理数系の科目の学力強化や, いくつかの科目の配当順序, 学年間の配当科目のバランスの改善が必要であることが認識されたので, 完成年度を迎えた後にカリキュラムを修正することを計画し, 23年度中に学科内で新しいカリキュラムを完成する予定である。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

入試のタイプによっては, 数学や理科の学力を問われないため, 高校時の数学や理科の学習が不十分な学生もいる。そのまま漠然と授業にでも総合科目や基礎専門科目での数学や理科系の科目の授業についていけない可能性があるため, 入学時のガイダンスや関連した内容の授業中に, そのような科目と将来の希望する仕事や希望資格との関わりをわかりやすく説明し, 学習意欲を持たせるように指導した。

学力レベルを考慮した授業内容展開を科目担当者へ依頼するとともに、専任教員担当科目では、学生のレベルを確認しながら中学や高校での学習内容、科目とのつながりから導入し、本来の内容へ導くよう努めた。その結果、二年次やそれ以降の学年では前年度に不合格となった学生にも理解を深めながら単位を修得出来た者や、その他の科目への取り組み態度に変化が現れた者が見られた。一年次ではこのような学習効果を考慮し、成績の合否は特に厳格に評価し、学生各自が自分に不足している学力に気付き、程度によってはその現状が自分の進路にとっていかに障害になるかを気づかせることで、早いうちからの学力の向上に努めさせるようにした。その結果、二年次の履修ガイダンスや個人面談において、一年次の成績不振者から、前年度の自分の学習態度に対する反省と新年度の意欲が感じられる発言が多くみられ、実際に二年次では出席状況や学習態度の改善が見られた。毎年、一年次前期は騒がしくなる授業が多いことが問題であるが、全体に対する注意を何度も行なうとともに、前述のように科目の意義や重要性をわかりやすく説明し、厳格な評価を行うことで、学年が進むほど気付きと改善が見られる学生数が増加し、真剣に学ぶ学生が増えたので授業環境も学年進行につれてかなり良好となり、学生の集中度が高くなった。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

1年から3年前期まではグループ担任が個人面談や成績表配布を行い、生活面、学習面の指導を行った。その際、出席状況や学習態度に問題があるなど気がかりな学生には特に気を配り、相談、助言した。3年後期からは卒業研究配属先の教員が履修指導や卒業研究指導のみならず就職活動における指導もグループ及び個別で行った。各教員は就職に関する個別指導や就職活動状況の把握につとめ、一対一のきめ細かな指導を心がけた。就職対策委員は学科の就職に関する情報の把握に務め学科内で学生の動向情報を共有できるよう学科会議で報告した。就職関連のみならず学生指導において欠席の多い学生等、心配な学生についてはグループ担任や該当科目担当者から学科会議に適宜報告し、全教員で情報の共有と解決への協力を努めた。学生には日頃の挨拶等の礼儀正しさが結局就職活動に大きく影響するので、日常のマナーの向上の大切さを伝え、指導した。その結果、他学科、他学部の学生に比べて、教員や職員に挨拶をする学生が多いという評判を得ている。

4. 卒業研究指導について

一期生が3年次を迎え、夏休み前に研究室配属を実施した。8名の教員が各7から11名の卒業研究を指導する形で配属した。配属実施前には卒業研究や論文についてのガイダンスを実施し、各研究室のテーマを説明するポスターを掲示して、学生に周知し、学生は研究室を回って疑問点等を質問し、面接やレポート提出を経て希望書を提出して選考を受けた。配属後は各指導教官によるプレゼミを実施し、卒業研究に必要な知識の教授や演習を行った。研究室における指導は研究指導のみならず、学習上の問題や学生生活全般に及んだ。

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

健康運動実践指導者試験対策の授業においては受験科目の各担当教員がそれぞれ模擬問題を作成し、学生の受験対策の学習に利用した。その結果、3年次で9名が受験し、8名が合格した。健康

運動指導士は卒業見込みで受験可能となるため23年度より受験が可能となる。こちらは対策授業において各科目の担当者がリレー講義を行う予定である。受験に必要な単位の一つである実地研修をコナミスポーツ各店で実施し、スポーツ指導における現場を体験させた。

「保健体育」の教職課程に登録している学生は、3年次生30名、2年次生38名、1年次生21名であり、各学年に配当された教職に関する科目や教科に関する科目を履修している。教員免許状の取得へ向けて、保健体育科教育法では模擬授業などの実践的な指導も実施し、現場へ出ることを念頭に置いて厳しく合否判定をしている。23年5月以降には4年次生が教育実習に出る予定である。

6. 添付資料

なし

以上

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

学科の教育目標は, 自立的にものごと考える力があり, コンテンツ制作のための創造力と技術力を備え, それを発信するコミュニケーション能力と社会性を身に付けた人物を育てることにある。この意味するところは, 学科の教育目標が単にデジタルクリエイターを育てるということではなく, 職種を問わず幅広い分野において社会で活躍できる人物を育てるということでもある。

一昨年度から学科内に設けたWG「カリキュラム改訂委員会」を中心に新カリキュラム(平成23年度)について学科会議で検討してきたが, ようやく成案を得ることができた。カリキュラム作成にあたっては, 「想い描く」「創造する」「発信する」というコンセプトをもとに, コンテンツ制作のコア科目をまず設置し, 次にその関連科目を配置した。また, 学生の職業意識の向上と就職対策を目的として, 1年次に「キャリアデザイン1」を2年時に「キャリアデザイン2」を3年次に「キャリアブライニング論」を設置した。さらに, 卒業研究・制作を必修とすることにより, 学生を自立した人間として社会へ送り出す体制の強化を図ることにした。新カリキュラムは本年4月より施行される予定である。

シラバスについては, 授業内容がよくわかり学生の学生が主体的に自主的に学習できる内容となるように配慮した。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

これまで学科内にWG「情報共有委員会」を設置し, 科目内容の点検を行ったが, その成果を活かすために, 科目担当者の一部変更やシラバスの変更を行った。具体的には, 「メディアリテラシー演習」の担当者を変更し, 情報倫理やメディアを通じた情報の受信・発信についての能力を育成する内容の充実を図った。また, 「ゼミナール入門」では各教員がリレー式で講義を担当しているが, 今年度から1名の教員が授業の後半を利用して毎回レポート課題を与えるなど指導の強化を図った。

講義科目については, 例年私語などに対する学生の苦情がある科目がある。この点を改善するためにオリエンテーション時期から取り組みを始めた。日常のあいさつの励行など学生の学ぶ姿勢の向上につながるような基本的なことを授業内外で試みた。授業内容や方法についても教員各自の創意工夫を求めた。

演習科目については, 単なる技能・技術の習得だけではなく, コミュニケーション力をつけるための方略としてグループワークを従来から多く取り入れている。コンテンツ制作現場はもちろん, 一般企業でも共同作業は重要であるので, 学生によってはグループワークの苦手なものもいるが, 学科の方針として今後もコミュニケーション活動を重視していきたい。

成績評価については、教員間のバラツキを少なくし学生の中に不公平感が起きないように注意した。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

「ゼミナール入門」(1年次前期)は、学生が学科でどのような学生生活を送っていけばよいのかという指針になるような科目として位置付けている。専任教員がリレー式に講義をし、学生が学科での学習や将来像をイメージしやすいように配慮している。学外でプロのコンテンツ制作者として活躍している教員の講義は学生にとって特に刺激や励みになっているようである。

学生の生活面についてはグループ担任のまとめ役の教員を決め、その教員に情報が集約されるようにしている。また、学生の休学、退学といった問題があった場合には、本人だけではなくできるだけ保護者とも直接話をするように学科では確認している。精神的な問題を抱えている学生が予想外に多く、情報共有ということを全教員が強く意識しており、学科会議では学生の状況について毎回確認してきた。

就職については、入口科目・出口科目を設定しているが、それにとどまらず日頃から学生の職業意識を育むように教員は努めている。また、進路支援室の有効利用についても指導してきた。履歴書やエントリーシートの作成といった技術的な指導については、進路支援室だけではなく各教員も指導することで対応した。また、学生の文章力の低さが問題となっており、この点については、「ゼミナール入門」で毎回作文の提出を求め、さらには他の授業でも文章作成の機会を多くするなど、文章を書く習慣作りに努めた。

4. 卒業研究・制作指導について

卒業研究・制作の発表会である「なわてん」については、今年度もW学科とT学科と共同開催し、成功裏に終えることができた。教員の熱心な指導もあり作品レベルは年々向上してきている。学外での開催も考えるべき時期なのかもしれないが、予算面での苦労が今以上に予想される。卒業研究や卒業制作作品は外部からの評価の対象となり、ひいては学科の評価につながるもので、質の向上にさらに学科として取り組んでいく予定である。

今年度から、オープンキャンパスの期間に学科の全研究室を開放し、卒業研究・制作の中間発表の場とした。また、9月には、プレゼンテーションの形で、中間発表会を開催した。その効果があったのか、今年度末の卒業研究・制作発表会での全体的なプレゼンテーションのレベルが上がったと思われる。

今年度はほとんどの研究室において就職率がきわめて悪かった。この点は学科内でも討議をし、学生の就職意識の向上に各教員は努めてきたが、反省する点の多い結果となったのも事実である。次年度には、各研究室で学生の就職活動の実体を把握し、具体的な行動を伴う指導をしたく思っている。学生の気質や将来像が他学部の学生とは異なる面があり、難しい点もあるが、就職を望む学

生の援助には学科としての協力体制の強化を図りたい。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

(1) 学生とプロの教員スタッフとの共同プロジェクト「電Ch!」によるWebコンテンツ・コンペのうちの1つである実写映像作品「おかつちゃん旅に出る」が完成し, Web上公開ならびに劇場公開された。企画に参加した学生達はコンテンツ制作の貴重な経験をする事ができたと思われる。こうした活動を通じて学生はプロの厳しさを学ぶだけではなく, 学習に対する意識も前向きに変わっていくようなので, 学科としては今後もこの活動を支援していく予定である。(<http://denchan.tv>を参照のこと)

(2) 今年度も中国江南大学から留学生を受け入れた。留学生への事前指導として, 前年度に引き続きQとWの教員が提携校の江南大学で講義と演習を行った。同校での授業は学生から好評を得たとの報告を得ている。

留学生たちは全員授業にも熱心で, 学業成績も極めて良好であり, 充実した学生生活を送っているように見受けられる。留学生対象に国際交流センター主催で国際交流授業が開催されたが, 受講生には特別活動の単位を認定することとした。

以下は江南大学へ講義に出向いた本学科の教員数と渡航期間である。

- 2010年5月8日—11日 1名
- 2010年9月5日—9日 2名
- 2010年10月30日—11月6日 3名

(3) 今年度もシェリダン大学との交換留学プログラムを実施し, 同大学に6名の学生が2010年9月20日より10月2日の期間短期留学をした。参加学生は学習面や生活面で大いに刺激を受けて帰国し, 他の学生にもよい影響を与える傾向があるので, 今後もこのプログラムの充実を図りたい。

(4) 今年度よりオランダのユトレヒト芸術大学との交換留学制度が発足した。本学科より1名の学生が2011年8月29日より2011年1月27日まで留学した。参加学生は同大学でプロジェクトに参画し作品制作するなど勢力的に活動したとの報告を受けている。本人にとっては今後のCG分野での活躍の刺激になったようである。

(5) 2011年1月18日にタイ王国のNational Electronics and Computer Technology Centerの研究員・職員ならびに同センター主催のアニメーションコンテストで優勝した高校生と大学生からなる訪問団が本学四条畷キャンパスへ訪れ, 本学科からは3名の教員が対応にあたった。

(6) 学外でのインターンシップやJIAMSとの産学協同のコンテンツ制作により参加学生は力をつけているようであり, 就職へつながる可能性も大きいと考えている。

6. 添付資料

卒業研究・制作については, 2010年度卒業研究・制作発表要綱ならびに「なわてん図録2011」

をご参照ください。

学科の全般的な活動については学科ブログサイト <http://www.ddaa.jp/> をご覧ください。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

2008年度の学科専門科目カリキュラム改訂において、学生の興味関心と学科の人材育成目標との最適化を図ることを目的に、従来の3コース制から新たに6ユニット制へ変更し、学際領域を横断的によりダイナミックに学べる自由度の高いカリキュラムへとアップデートした。具体的には、情報工学系科目群としてScience・Development・Systemの3つのユニット、芸術デザイン系科目群としてArt & Design・Graphicsの2つのユニット、企画プロデュース系科目群をEntertainmentとして編成している。

選択肢の増加は学びの自由度が上がる一方で、学生各自のカリキュラム設計を複雑にしてしまう負の要素も併せ持つ。その点を解決するツールとして、履修をサポートするための4年間のカリキュラムリスト(添付資料1. W2008年度カリキュラム.pdf)を制作し各年次で開催している進級時のガイダンス時に配布し、学生各人の履修状況の確認に用いている。新カリキュラムへの移行3年目を迎えたが、学生各自の興味領域や志向が、明確に履修科目の選択に現れていることが見て取れる。

1年次生を対象に前期土曜日の集中開講による「大学入門」を総合科目群の中にデジタルアート・アニメーション学科と合同で独自に設定し、大学での学びのシステムやスタイル、またその活用方法について理解を促している。同様に、1年次前期開講の「日本語表現法」においても、環境適応性・自主性・協調性を、自然に身に付けさせることを目的として、自己分析と自分表現を出発点に、グループワークでの企画立案・コンテンツ制作を体験させ、最終的にはプレゼンテーションまでの流れを形成し、学科における学生各自の立ち位置を相互に理解し合う場としても機能している。

これらの科目は、学生相互の人間関係の形成に大きく影響するものであり、初期段階でのドロップアウトを防ぐ効果もあると考えている。

4年間を通して、グループ単位で主体的活動をおこなう授業の組み立てを多く配置し、社会から期待されるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力をはじめとした人間力の育成を意図している。

シラバスの記載に際しては、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

科目の目的では、この科目を学んで身につけられること(知識、能力)ができるだけ具体的に分かるように記述している。

内容・目標は、実際に行なう内容に即した15回の記述を原則としている。

評価方法は、評価項目とその重みだけでなく、評価項目の意味するところの説明も記述している。

特に第1回目の授業ガイダンスにおいて、シラバスの内容を詳細に説明する資料を別途配布し、シラバスの内容が意味するところ、教員の授業観・学生観、授業方法について解説している。また、この科目での学習方法もアドバイスしている。

シラバスに記載した科目の目標や内容に対応する形で、科目において課す課題を明示し、学生の科目に対する理解をより促すよう配慮している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

成績評価については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

シラバスに記載した評価基準を、第1回目の授業ガイダンスで説明するとともに、中間テストや、定期試験の前に、それらを再度説明している。また、教育的配慮において、その評価基準を変更する必要が生じた時は、受講生にあらかじめ授業中に説明し、受講生が不利にならないような、変更にとどめている。

教育改善や授業点検については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

毎回到業終了10分前には、その回のまとめを行ない、受講生にラーニングアウトカム(学んだこと)を、各自で整理するよう促している。

学生の志向と資質、技術の進展に合わせて、同一科目であっても、毎年、教授内容を柔軟に変更させている。

各回の授業概要を、授業開始までにウェブサイト上に公開し、授業終了以降も授業期間中は閲覧・参照できるようにしている。授業概要には、講義の要約や課題内容を記載し、自学のサポートとなるよう配慮している。

授業アンケートを積極的に取り入れ、授業改善レポートについても、真摯に回答するよう努めている。センターの集約によるウェブでの公開のみならず、授業内でもアンケート結果に触れ、担当教員としての見解を明確に示した。

授業への積極的な参加を促すとともに知識の定着を図るため、授業中に調べ学習やミニレポート作成をおこなっている。提出物については授業内でフォローするよう配慮している。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

新年度を迎える前に, 各年次(新2年次・新3年次・新4年次)に対して, それぞれ学科教育内容に関するガイダンスを実施し, 各年次での教育内容の主要なポイントを解説するとともに, 教育目標を再確認することで学科教育に対するモチベーションの維持向上を促している。

また, 編入生・転科生などに対しては入学時にほぼ一対一の履修指導を実施し, 各自の入学以前の学修状況を鑑み, 学科教育にスムーズに浸透していける履修プログラムの設計について指導している。

学生指導については, 学科教員個々に以下の配慮がなされている。

質問や相談に訪れやすいように, 授業で適宜アナウンスをしている。また具体的に, 教員室のドアをいつも半開き程度にし, 学生がのぞきやすい印象を持ってもらえるようにしている。

プログラミング技術について教える際, できるだけその技術が現場で使われている例を最初に示し, なぜその技術が必要なのかを理解させてから, 詳細の説明に移っている。

デザイン系科目においては, デザイン思考の開発と表現技術の獲得の両面から教育指導にあたり, 特に多様な表現形態について視る眼を養うことを意識し, 課題作品の講評の際には学生作品1点ずつにコメントを付している。

心理的・精神的な問題を抱える学生については, カウンセラーとの密な連携を取って指導にあっている。

就職活動に対するサポート(エントリーシート添削や会社見学の引率など)を実施している。

礼節の大切さと実践する気持ちよさを, 毎回の授業で体感させることを徹底している。具体的には, 授業開始時に大きな声で「おはようございます」と発声し, それに対して学生も「おはようございます」と返す。授業終了時に大きな声で「おつかれさまでした」と言い, それに対して学生も「おつかれさまでした」と返すというものである。

協働の精神, 個人の社会性の向上, 社会への寄与の研究姿勢を持たせ, 生の声を直接聞き, 変化する社会を表と裏から見る事で, 現場意識と政治への関心, 実践力をつけることを強く意識している。フィールドで生の実態を掴むと同時に, 学術的態度として俯瞰的, 普遍的, 根源的なものの方をさせるようにしている。

編入生および留学生については、それぞれを対象とした履修指導を実施している。また、履修登録時においても事務職員による説明会に学科教員を配置し、個別の質問などに対応できるよう配慮している。

就職活動に対するサポートとして、言語能力の向上を目指し、小論文の課題や社説の音読・要約に取り組ませている。最初は教員が各自の小論文や要約の添削をおこない、学生が慣れた時点で相互添削をさせている。評価者になることで、より意識的に文章を読む・書くという習慣づけを図っている。

就職活動記録シート(添付資料2. W就職活動記録シート.xls)を導入している。その書式に学生各自が就職活動状況を記入し、指導教員に月に1度報告するしくみをつくり、ゼミ所属学生の就職活動状況の把握と指導に用いている。

4. 卒業研究指導について

4年次へ進級する段階でガイダンスを実施し、卒業研究および制作のガイドライン(添付資料3. W卒業研究制作ガイドライン.doc)について明確に説明している。また、卒業研究および制作に関する各種イベントのスケジュール(添付資料4. W卒業研究制作スケジュール.xls)についても、この時点で発表し、学生の自主的な取り組みの立ち上がりを促している。

卒業研究・制作指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

研究室内でのゼミ以外に、毎月、学外者(他学科、他大学、企業関係者)との研究会を開催し、視点・視座・価値観の多様さが重要であることを意識させている。さらに議事録を書かせ、ドキュメンテーション力を高めている。また、その場で3ヶ月に1回は研究報告もさせ、プレゼンテーション、コミュニケーション力の実践的能力の育成をしている。

定期的に学外者(OB、他大学教員、企業関係者)と合宿ゼミを開催し、集中的な討議の経験をさせている。そこでは、新入社員としてのマナーや基礎知識の訓練もおこなっている。

他大学の研究室に見学に出かけ、研究に対する取り組みの姿勢やレベルの参考にさせている。

3年次後期の研究室配属決定後、ゼミ所属学生個々が講師となって、各自の興味領域について講演をおこなう課題を課している。ゼミ生相互の個性を理解する一助とするとともに、講演のための資料準備やプレゼンテーションを通して、その後の研究・制作発表への導入としている。

4年生時から積極的に学会発表(ゲーム学会、電子情報通信学会、情報処理学会、芸術科学会など)をおこなっている。

学外での作品発表(ET2010、なわてふれあい商工まつりなど)をおこなっている。

積極的にコンテストやコンペティション(文化庁学生CGコンテストなど)に応募している。

自治体や地域との連携として、寝屋川市まちづくりに関する市民意識調査をゼミで実施するなど、制作・研究テーマとして地域貢献(寝屋川市の防犯、防災、経済活性化策など)を主題にしている。

英語文献、学会誌なども含め、多様な情報源を活用して知識の習得に努めさせている。本研究室の特徴となる技術については、テーマに関係なく全員に習得させるため、集中的に課題に取り組ませている。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

学科独自の教育としては、以下の取り組みがあげられる。

入学後早期に学生の把握をおこなうことを目的に、新入生の顔写真撮影を実施している。

ノートパソコン導入教育(5~7コマ)を実施している。学科教材としてのノートパソコンを学生生活の中で有効活用するために、初期段階で集中的なリテラシー教育を実施している。

4月から5月の期間は、特に新入学生の動向についての情報交換を、学科会議および学科メーリングリストを通じて頻繁におこなっている。

年度当初には学科教育に参画いただいている非常勤講師の方との懇談会を実施し、学科教育目標や科目連携の確認をおこなうとともに、幅広い専門領域を持った教員相互の親睦を深める機会としている。

5月中旬に新入生歓迎会を実施している。単なる懇親の場としてだけでなく、「日本語表現法」の授業内で形成されたグループごとに、ショートプログラムを企画・実施し、授業との連動による教育的な側面も加味したイベントとなっている。

Tokyo Game Showへの出展を、学内コンペ形式で展示作品の選考をおこない実施している。授業内でのコンテンツ制作指導を端緒として、授業外においても学生の自主的なグループ編成によるコンテンツ制作に取り組む体制が形成され、授業の枠を超えて学科専門教育の見地から教育効果が非常に高いプログラムであると判断している。

総合情報学部としてカナダ・シェリダンカレッジとの短期交換留学制度を実施している。国際コミュニケーション能力の養成という観点で、参加学生の成長は著しいものがあると感じている。

中国・江南大学との国際交流協定のもと、デジタルアート・アニメーション学科、デジタルゲーム学科両学科教員の現地での出張講義を実施している。日本語能力を研鑽中の学生が対象であるため、チームティーチングの実施や教材の検証・開発など授業運営の工夫が必要であり、本来の設定目的とは別に教員研修としての機能も併せ持っている。

3年次前期開講の「プレゼミ」においては、専任教員の各研究室の研究・制作テーマや指導内容などについて、理解を促すためのプレゼンテーションを実施し、卒業研究・制作への導入として位置付けるとともに、SPI模擬試験の実施など進路選択の端緒としても捉えて授業運営をおこなっている。

インターンシッププログラムは、学科設立後3年次を迎えた段階で実施し、これまで継続的に展開している。教員のコネクションを通じた企業開拓や四條畷学務課・進路支援室の協力を得て、一定の企業数を確保して実施している。プログラムを修めた学生は、就業体験を通して協働の精神とコミュニケーション能力の重要性を強く認識し、その後の学生生活を送っている様子が見えてくる。

オープンキャンパスにおいて、学科学生主導のイベントを企画運営している。在学中に自分の所属する学科を客観的に分析し、学生の目線で学科広報の方向性を具体的に企画するイベントプロデュースを通じて、来訪者に対する学科のアピール向上と同時に、学生の専門分野の見地からの教育効果も併せて意図したものである。

卒業研究・制作発表会および「なわてん」の実施に際しては、4年次生の研究・作品発表の場として、その準備運営にはゼミに配属された3年次生が、教員の指導のもとあたっている。

学科設立当初から、教員相互また学外からの来訪者による授業参観は頻繁におこなわれていたため、授業参観については自由に受け入れる学科の雰囲気が形成されている。

TA・SA講習会を実施している。学外から招聘している演習補助員の方の協力をいただき、大学院・学部の学生のTA・SAとしての教育指導力向上を目的に、2008年度に初めて実施した。今年度は大学院2年次生を中心に実施・運営にあたった。

6. 添付資料

1. W2008年度カリキュラム.pdf
2. W就職活動記録シート.xls
3. W卒業研究制作ガイドライン.doc
4. W卒業研究制作スケジュール.xls

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

教育目標

本学科では, 以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている.

- 進化し続ける IT 技術の基盤となる知識の獲得
- 即戦力となり得る実践力の育成
- コミュニケーション能力などを中心とした社会性の向上

カリキュラム

本学科のカリキュラムは, ACM(世界最大のコンピュータサイエンスの学科)が策定した標準カリキュラムCC2001に対応している. 2005年の学科開設に合わせて, 上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計した. その後4年間の運用を踏まえて, 2009年度入学生から新カリキュラムを開始した. 新カリキュラムでは, コース制を規則化し, 実習・演習科目を増やし, 企業との連携授業を導入している.

JABEE

コンピュータサイエンス教育プログラム(略称CSコース)を設け, 外部第三者評価であるJABEE(日本技術者教育認定制度)の認定を目指し, 教育の質やサービスの向上に努めている. なお, JABEE認定を受けないコース(情報処理コース, 略称IPコース)の学生に対しても, 各科目における合格基準は同一にしている.

シラバス

本学科の専門科目のシラバスにおいては, 「授業目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている.

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

教育改善・授業点検

JABEEの認定を目指すべく, 各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた. 2009年度から学科内にFD担当教員を定め, FD会議を開き, 半期に1回授業内容の点検を行っている.

2009年10月にJABEEの審査を受け, 2010年5月13日付で本学科の「コンピュータサイエンス教育プログラム」が「情報および情報関連分野」のJABEE適合プログラムとして認定された. その評価を踏まえて, 今後さらなる教育改善を進めていく.

成績評価

本学科の方針として, 成績の相対評価は行わず, シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている. その結果として, 科目によっては合格率がかなり低いものもあり, 学科の平均としても他学科に比べると低い. また, 半期の授業で4回以上欠席すると未受験扱いにするというルールを設けている(シラバスに明記)ため, 受験率は低くなりがちである. これらの傾向は, 合格者のレベルを保証するためにある程度はやむを得ないが,

一方で授業の改善も必要である。

3. 学生指導(履修指導や教育相談,生活相談,就職指導など)について

履修指導

年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に,1年生向けには「ゼミナール演習1」,2年生向けには「ゼミナール演習2」の中で,学科の教育の方針やJABEEや履修のポイントについて説明を行っている。

教育相談・生活相談

グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが,2009年度からは,新入生を5グループに分けて,1グループにつき主担任1名,副担任1名の教員が担当している(担任は2年ごとの持ち回り)。

入学式直後の新入生オリエンテーションでは,2009年度からアイスブレイキングを導入している。また,4月19日に新入生歓迎会を実施し,学生同士や学生と教員が打ち解けるように工夫をした。

1年次の必修科目である「ゼミナール演習1」においては,グループ別の授業の回を設けて,担任教員に話をしやすいようにしている。また,この科目で欠席が多い学生に対しては,担任から本人や家庭へ連絡するようにしている。

就職指導

2010年度は,1年生向けに「ゼミナール演習1」の中で2回,2年生向けに「ゼミナール演習2」の中で6回,キャリア形成のための授業を実施した。

3年生向けに学科独自の進路ガイダンスを7月22日と1月6日に開催した。また,1月12, 19, 26, 27, 28日に学科教員有志による筆記試験対策講座を開催し,2月16日は模擬試験を行った(参加者は17~53名)。3年生の1月からは,学科独自に定めた「就職活動進捗管理票」を毎月指導教員に提出させ,その際に面談をして一人ずつに指導をおこなっている。

4年生に対しては,5月21日には学科主催の企業説明会を開催した。9企業にお越しいただき,41名の学生が参加した。学務課が発行する欠席証明書は,選考試験を伴わないと発行されないため,授業の欠席を気にして就職活動が鈍る学生がいたので,学科独自の「就活欠席証明書」を制定した。説明会だけでも指導教員が承認することによって証明書を発行し,学科教員の担当の授業であれば,正規の欠席証明書と同等に考慮するように申し合わせをした。

4. 卒業研究指導について

本学科では,3年次で「卒業研究」を行っている。2年次の7月に配属の研究室を決定し,2年次の後期にプレゼミを行い,3年次の年度初めから卒業研究を開始し,3年次の年度末に終了する。卒業研究の合格を4年次への進級条件にしている。また,3年次の月~金曜日の3,4時限に卒業研究を割り当てており,原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。

上述のような制度によって,学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ,問題解決能力,プログラミング能力,プレゼンテーション能力などを修得させる。これを3年次の年度末までに終わることによって,身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。

学科の方針として、研究テーマは一人ずつ異なり、複数人で1テーマは認めていない。合格の基準として、学習・教育目標の達成に加えて、540時間以上の従事、中間報告(口頭発表)2回、20ページ以上の論文、最終発表(口頭発表)、1000行以上のプログラム(CSコースのみ)を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い、可否を判定する。

最終発表会では、各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し、最優秀研究を選定する。上位の学生は、当該年度の学業優秀賞に推薦している。

世間では、就職活動が年々早期化しており、3年生の後半で開始しなければならないのが現状である。本学科では、その時期に卒業研究が佳境であり、学生の就職活動の開始が遅くなるのが問題になりつつあった。そこで、2010年度は、卒業研究の終了を論文の1ヶ月以上早め、論文提出期限を12月20日に設定し、最終発表会を12月27、28日に実施した。これによって問題はある程度緩和されたと思われる。

本学科では、以上のように独自の方法で卒業研究を実施しており、学生の能力向上に効果を上げていると思われるが、一方、途中で脱落する学生が少なからず存在する。2010年度では、この年度から新たに卒業研究を始めた学生77名のうち、同年度末に合格したのは61名(79.2%)であった。また、指導にかかるコストの割には、就職の実績につながっていないのではないかという意見もあり、実施方法については、さらなる検討が必要である。

なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている(CSコースでは必修)。2010年度のこの科目の合格者は10名であった。

6. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

学科指定ノートPC

学科開設の2005年度から毎年新入生に学科指定のノートPCを購入させている。このノートPCのハードディスクは、学科独自に設定したもので、WindowsとLinuxのデュアルブートが可能であり、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。このPCを活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述のe-Learningを利用して、一般の授業にも役立っている。

E-Learning

MC2の協力を得て、ウェブベースのe-LearningのMoodleを学科として積極的に活用している。2010年度では、約70のコースが設けられており、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。

課外活動

「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。また、コンピュータグラフィックスに興味のある学生のために「メディアコンプロジェクト」と称する課外活動も実施している。

6. 参考資料

1. 資料1 メディアコンピュータシステム学科パンフレット
<http://cs-oecu.jp/wp-content/uploads/2009/07/cs-oecu-leaflet09.pdf>
2. 資料2 メディアコンピュータシステム学科ウェブページ
<http://www.cs-oecu.jp/>

年次	開講期	科目カテゴリ	科目名	単位	Science	Development	System	Art & Design	Graphics	Entertainment	
1	前期	ゲーム学	ゲーム学	2	ゲーム学	ゲーム学	ゲーム学	ゲーム学	ゲーム学	ゲーム学	
		ゲームと人間	ゲームの心理学	2	ゲームの心理学	ゲームの心理学	ゲームの心理学	ゲームの心理学	ゲームの心理学	ゲームの心理学	
		グラフィックス	ゲームグラフィックス入門演習	2					ゲームグラフィックス入門演習	ゲームグラフィックス入門演習	
		クリエイション	コンピュータ・グラフィックス基礎論	2		コンピュータ・グラフィックス基礎論		コンピュータ・グラフィックス基礎論		コンピュータ・グラフィックス基礎論	
			グラフィックデザイン・演習	2				グラフィックデザイン・演習			
	後期	ゲームの科学	基礎生物学	2	基礎生物学					基礎生物学	
		基礎力学	2	基礎力学		基礎力学					
		ゲームの数学1 (幾何・線形代数)	2	ゲームの数学1 (幾何・線形代数)		ゲームの数学1 (幾何・線形代数)					
		論理・離散数学	2	論理・離散数学		論理・離散数学					
		情報工学	コンピュータ入門	2		コンピュータ入門		コンピュータ入門		コンピュータ入門	

年次	開講期	科目カテゴリ	科目名	単位	Science	Development	System	Art & Design	Graphics	Entertainment
2	前期	グラフィックス	3Dグラフィックス演習1	4					3Dグラフィックス演習1	
		クリエイション	造形表現演習1	4				造形表現演習1		
			デザイン基礎	2				デザイン基礎		
		ゲーム学	ゲームシナリオ	2						ゲームシナリオ
		ゲームと人間	ゲームの社会学	2	ゲームの社会学					ゲームの社会学
	後期	ゲームの科学	認知科学	2	認知科学				認知科学	
		基礎化学	2	基礎化学						
		ゲームの数学2 (線形代数)	2	ゲームの数学2 (線形代数)						
		情報工学	コンピュータアーキテクチャ	2		コンピュータアーキテクチャ		コンピュータアーキテクチャ		
		情報通信論	2	情報通信論		情報通信論		情報通信論		

年次	開講期	科目カテゴリ	科目名	単位	Science	Development	System	Art & Design	Graphics	Entertainment
3	前期	グラフィックス	Webデザイン・演習	2					Webデザイン・演習	
		クリエイション	3Dグラフィックス演習2	2					3Dグラフィックス演習2	
			3DCGアニメーション・演習	2					3DCGアニメーション・演習	
		ゲーム学	コマース・デザイン	2					コマース・デザイン	
		ゲームと人間	サインデザイン	2				サインデザイン		
	後期	ゲームの科学	造形表現演習2	4				造形表現演習2		
		バーチャル・リアリティ	2				バーチャル・リアリティ			
		ユニバーサルデザイン論	2				ユニバーサルデザイン論			
		ゲーム学	キャリアプランニング	2					キャリアプランニング	
		ゲームと人間	ゲームインタフェース演習	4		ゲームインタフェース演習			ゲームインタフェース演習	

年次	開講期	科目カテゴリ	科目名	単位	Science	Development	System	Art & Design	Graphics	Entertainment
4	前期	グラフィックス	VRプログラミング演習	4					VRプログラミング演習	
		クリエイション	モーションプログラミング演習	4					モーションプログラミング演習	
			インダストリアル・デザイン	2				インダストリアル・デザイン		
		ゲーム学	映像制作演習	4				映像制作演習		
		ゲームと人間	コンピュータミュージック・演習	2				コンピュータミュージック・演習		
	後期	ゲームの科学	インストラクショナル・デザイン	2					インストラクショナル・デザイン	
		エデュテイメント・デザイン	2				エデュテイメント・デザイン			
		ゲームマネジメント	2				ゲームマネジメント			
		ゲームと人間	リハビリゲーム論	2	リハビリゲーム論			リハビリゲーム論		
		ゲームの科学	シミュレーション技法	2	シミュレーション技法		シミュレーション技法			

年次	開講期	科目カテゴリ	科目名	単位	Science	Development	System	Art & Design	Graphics	Entertainment
4	前期	グラフィックス	映像音響論	2					映像音響論	
		クリエイション	DTP	2				DTP		
			エクサティメント・デザイン	2				エクサティメント・デザイン		
		ゲームと人間	身体障害論	2	身体障害論			身体障害論		
		ゲームの科学	バリアフリー設計論	2	バリアフリー設計論			バリアフリー設計論		
	後期	ゲームの科学	運動計測学	2	運動計測学			運動計測学		
		情報工学	バイオメカニクス	2	バイオメカニクス			バイオメカニクス		
		ゲームと人間	情報セキュリティ	2	情報セキュリティ		情報セキュリティ			
		ゲームと人間	障害者心理学	2	障害者心理学			障害者心理学		障害者心理学
		ゲームと人間	精神医学	2	精神医学			精神医学		精神医学

卒業要件 1. 休学・停学期間を除き4年以上在学していること。 2. 卒業要件単位数128単位以上を修得していること。 3. 少なくとも2つのユニット修得要件を満たしていること。 4. 卒業研究または卒業制作を修得していること。

履修上の取り扱い 1. 一年以内に履修できる単位数は、60単位を超えないものとする。ただし、留年生については、この限りではない。 2. 専門教育科目のうち、選択科目については、在籍年次より上の年次に配当されている授業科目も履修可とする。ただし、受講人数が多い場合は、履修制限をおこなう。 3. ユニットの修得要件は、各ユニット科目の中から、必修科目を含み38単位以上履修すること。 4. 他学部専門教育科目のうち、指定された授業科目について、選択科目として20単位まで履修することができる。ただし、在籍年次より上の年次に配当されている授業科目については、履修できない。 また、受講人数が多い場合は、履修制限をおこなう。

専門教育科目 (必修)
選択科目 (選択)
Science ユニットの必修科目
Development ユニットの必修科目
System ユニットの必修科目
Art & Design ユニットの必修科目
Graphics ユニットの必修科目
Entertainment ユニットの必修科目



デジタルゲーム学科 就職活動記 状況を入力して印刷。翌月の7日までにゼミ教員に手渡しで提出してください。

学生番号: W 名: 付: 2012/1/10 ゼミ教員:	活動メモ
--	------

【到達段階の入力内容】 セル上段は状況を表す記号を入力 ... : その段階に進んだが結果は未, : 結果がOK, : 結果がNG,
 セル下段はその段階に至った月日を入力 ... 月/日

活動先(企業名など)	到達段階(活動はどの段階ですか?)										
	プレ エントリー	合同 説明会	会社 説明会	ES, 履歴 書提出	書類選考	1次選考	2次選考	3次選考	最終選考	内定通知 受領	内定届 提出
例 株式会社デジタルゲームス	1/6		1/13	1/20	1/27	筆 2/3	面 2/10		面 2/17	2/24	2/25
1											
2											
3											
4											
5											
6											
7											
8											
9											
10											
11											
12											
13											
14											
15											
16											
17											
18											
19											
20											
21											
22											

卒業研究（8単位）の単位認定要件

- 1) 卒業研究・卒業制作中間報告会での報告
 - ・研究室ごとに開催日を2日に分けて、3研究室合同4セッションで実施
 - ・所属研究室の実施日への出席が必須
- 2) 卒業研究発表予稿の提出
 - ・学科指定のフォーマット、要件は別途指示する
- 3) 卒業研究・卒業制作発表会での発表
 - ・研究室ごとに開催日を2日に分けて、4研究室合同3セッションで実施
 - ・すべての実施日への出席が必須
- 4) 研究成果物の提出
 - ・論文のハードコピーを必須とし、付随する作品などを提示しても良い
 - ・論文の要件は別途指示する
 - ・作品は、展示、保存、再生が可能なことを条件に、任意の形態とする

以下は、卒業研究・卒業制作発表会において選抜された研究が対象学部での調整が必要なため、詳細は未定

- 5) 卒業研究概要の提出
 - ・学科指定のフォーマット、要件は別途指示する
- 6) なわてんへの出展
- 7) なわてん図録への投稿

卒業制作（6単位）の単位認定要件

- 1) 卒業研究・卒業制作中間報告会での報告
 - ・研究室ごとに開催日を2日に分けて、3研究室合同4セッションで実施
 - ・所属研究室の実施日への出席が必須
- 3) 卒業研究・卒業制作発表会での発表
 - ・研究室ごとに開催日を2日に分けて、4研究室合同3セッションで実施
 - ・すべての実施日への出席が必須
- 4) 制作成果物の提示
 - ・作品は、展示、保存、再生が可能なことを条件に、任意の形態とする
- 5) 卒業制作概要の提出
 - ・学科指定のフォーマット、要件は別途指示する

以下は、卒業研究・卒業制作発表会において選抜された制作が対象学部での調整が必要なため、詳細は未定

- 6) なわてんへの出展
- 7) なわてん図録への投稿

2011年					2012年								
9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月	
1 木		1 土		1 火		1 木		1 日	元日	1 水		1 木	
2 金		2 日		2 水		2 金		2 月	振替休日	2 木	後期試験	2 金	
3 土		3 月		3 木	文化の日	3 土		3 火		3 金	後期試験	3 土	
4 日		4 火		4 金	大学祭	4 日		4 水		4 土	後期試験	4 日	
5 月		5 水		5 土	大学祭	5 月		5 木		5 日		5 月	
6 火		6 木		6 日	大学祭	6 火		6 金		6 月	後期試験	6 火	
7 水		7 金		7 月	大学祭後片付け休講	7 水		7 土		7 火	後期試験	7 水	
8 木		8 土		8 火		8 木		8 日		8 水		8 木	
9 金		9 日		9 水		9 金	卒業研究予稿提出締切	9 月	成人の日	9 木		9 金	
10 土		10 月	体育の日	10 木		10 土		10 火		10 金		10 土	
11 日		11 火		11 金		11 日		11 水		11 土	なわてん(予定) 建国記念の日	11 日	
12 月		12 水		12 土		12 月		12 木		12 日	なわてん(予定)	12 月	
13 火		13 木		13 日		13 火		13 金		13 月		13 火	
14 水	TGS 2011搬入	14 金		14 月		14 水		14 土		14 火		14 水	
15 木	TGS 2011	15 土		15 火		15 木		15 日		15 水		15 木	
16 金	TGS 2011	16 日		16 水		16 金	発表会A日程	16 月		16 木		16 金	
17 土	TGS 2011	17 月		17 木		17 土	発表会B日程	17 火		17 金		17 土	
18 日	TGS 2011	18 火		18 金		18 日		18 水		18 土		18 日	
19 月	敬老の日	19 水		19 土		19 月		19 木		19 日		19 月	
20 火		20 木		20 日		20 火		20 金		20 月		20 火	春分の日
21 水	成績発表	21 金	中間報告会A日程	21 月		21 水		21 土	補講日	21 火		21 水	
22 木	成績発表	22 土		22 火		22 木		22 日		22 水		22 木	
23 金	秋分の日	23 日		23 水	勤労感謝の日	23 金	天皇誕生日	23 月		23 木		23 金	
24 土		24 月		24 木		24 土		24 火		24 金		24 土	学位授与式
25 日		25 火		25 金		25 日		25 水		25 土		25 日	
26 月		26 水		26 土		26 月		26 木		26 日		26 月	
27 火		27 木		27 日		27 火		27 金	論文および概要提出	27 月	成績発表	27 火	
28 水		28 金	中間報告会B日程	28 月		28 水		28 土	補講日	28 火	成績発表	28 水	
29 木		29 土		29 火		29 木		29 日		29 水		29 木	
30 金		30 日		30 水		30 金		30 月	選抜結果の発表			30 金	
		31 月				31 土		31 火				31 土	